

わたしの主張2007 (第29回少年の主張秋田県大会) が9月14日、能代市立東雲中学校で行われ、藤里中学校3年の浅利奈都子さん(荒町)が最優秀賞を受賞しました。

同大会は、青少年健全育成秋田県民会議・秋田県が主催して

わたしの主張 2007 第29回少年の主張秋田県大会 浅利さん(藤里中3年)最優秀賞 全国大会出場が決まる!

『苦しさの先に見つけたもの』

「藤里中学校 銀賞。」

頭の中が真っ白になりました。銀色のシールが貼られた賞状をどう受け取ったか覚えていません。各校代表がステージに並んだ中で、多分一番先に泣いてしまったと思います。おさえることのできない悔しさと悲しさ。止めようもなく涙があふれてきました。

私たち吹奏楽部は、本当に必死に練習してきました。一年生のアンサンブル大会で金賞、昨年の県北大大会でも金賞、二年生のアンサンブル大会で再び金賞。三年生になった今年の県北大大会では、金賞でなければならなかったのです。金賞以外はダメだったのです。今思えば、何という傲慢な考えだったでしょう。でも、それ程、練習に打ち込んできたともいえます。

特に三年生の部員の絆は固く、三年前から吹奏楽部のこの九人と合奏するときの楽しさは何にもかえられません。練習量も、運動部にも負けず、休みも返上で練習してきました。何よりも、練習が楽しかったのです。

ただ、私には、誰にもいえない悩みがありました。三年生になって、急に私は、大好きなサクソからトランペットに変えられてしまったのです。「どうして私が」と思わずにはいられませんでした。でも、部長である私は、今回のコンクールのためにも、みんなのためにも、頑張らねばと思い続けてきたのです。

大館市のコンクール会場からバスに乗った私は、声を出して泣きました。一時間、ずっと泣き続けました。人前で、声を出して泣く。それがどんなに、かっこ悪いことか分かっていました。でも、そうするしかできませんでした。部員全員が泣き、先生も一緒になって泣きました。バスの中で講評を見せてもらおうと、ある審査員の特に低い点数が目に入り、その点数と審査員を恨む気持ちがわいてきました。

その後、何のやる気も起きず、数日を過ごしました。学校で伝達集会の後、校長先生は、こうおっしゃいました。

「吹奏楽部はすばらしい演奏だった。人の耳が採点するものだから、残念な結果に終わったが、できれば、どんな人をも感動させるような音楽を目指して、これからも頑張ってもらいたい。」私は、この時、これから何をやっていけばいいのか分かったような気がしました。そして、その日、部活動の顧問の先生は、「これからは、自分たちで音楽を楽し



浅利奈都子さん

おり、事前の作文審査を通過した10人が出場し、最優秀賞1人、優秀賞4人、優良賞5人を決めました。また、このたび北海道・東北地区の最優秀賞者の中から、全国大会出場者を決める審査会を見事通過し、11月10日(土)・11日(日)に東京で開かれる全国大会へ出場します。

み、そして聞いてくれる人たちにも、楽しんでもらおう。」とおっしゃいました。「音楽を楽しむ。」そして、聴く人にもそれが伝わる。なんてうれしいことだろう。それでいいのか。それでいいんだ。

あの日からまた、三年生もいつもと同じ顔で、一生懸命練習に励んでいます。これから文化祭も、歩行者天国での演奏会もあるのです。今、私たちは、「音楽が好き。」という純粋な本来の気持ちのまま、吹奏楽部を続けています。そして、この時間が本当に楽しい。

私は、改めて、楽器を吹く楽しさと、友だちと演奏するうれしさを実感しています。そして、こんなに夢中になれるものがあることを密かに誇りに思っています。「生きている」と実感できる瞬間なのです。

もし、あの時、すんなり金賞を取っていたら。そう思うと怖い気がします。あれは、私の挫折です。しかし、この挫折がなかったら本当の大切なことに気付けなかったと思います。今私がやりたいのは、「勝つ」ための音楽ではなく、「誰か」に伝わる音楽なのです。

こんなに苦しい思いをしたのは、初めてです。しかし、私がこれから進んでいく上で、大切な通過点だったように思えるのです。

だから、今、伝えたい。今なら伝えられます。私のそばで、失敗して自信を失っている人に。私の知らないところで、挫折してしまった人に。挫折は決して、マイナスではないって。その先に必ず、見付かるものはあるのです。その先にこそ、本当のものが見えてくるって。痛みの知らない人より、辛い痛みのわかる人の方がずっと魅力的に思えます。そして、私は、ほんの少し、そこに近づいたように思えます。今日も私は、心の底から楽しんで楽器を演奏しようと思います。